

番号	訂正箇所		原文	訂正文
	ページ	行		
1	78	側注3	③ JIS A 6005:2005 参照。	③ JIS A 6005:2014 参照。
	80	側注6	⑥ JIS G 3302:2012 参照。	⑥ JIS G 3302:2022 参照。
		側注8	⑧ JIS G 3312:2013 参照。	⑧ JIS G 3312:2019 参照。
	86	側注1	① JIS A 5422:2014 参照。	① JIS A 5422:2019 参照。
	88	側注1	① JIS A 6005:2005 参照。	① JIS A 6005:2014 参照。
側注2		② JIS A 5505:2014 参照。	② JIS A 5505:2020 参照。	
98	側注1	① JIS A 5705:2005 参照。 おもに塩化ビニル樹脂を 材料としている。	① JIS A 5705:2022 参照。 おもに塩化ビニル樹脂を 材料としている。	
	側注2	② JIS A5902:2004 参照。 挿入	② JIS A_5902:2009 参照。	

番号	訂正箇所		原文	訂正文
	ページ	行		
1 (続き)	99	側注4	④ JIS A 5209:2008 参照。 単位には [%] を用いる。	④ JIS A 5209:2020 参照。 単位には [%] を用いる。
	128	側注2	② JIS G 3551:2005 参照。	② JIS G 3551:2021 参照。
	134	側注2	② JIS A 1101:2014 参照。	② JIS A 1101:2020 参照。
	137	側注1	① JIS A 1108:2018 「コンクリートの圧縮強度試験方法」とJIS A 1132:2014 「コンクリート強度試験用供試体の作り方」による。	① JIS A 1108:2018 「コンクリートの圧縮強度試験方法」とJIS A 1132:2020 「コンクリート強度試験用供試体の作り方」による。
	145	表13	(JIS A 5308:2014 による)	(JIS A 5308:2019 による)

番号	訂正箇所		原文	訂正文																																																
	ページ	行																																																		
1 (続き)	214	表7	<table border="1"> <thead> <tr> <th>鋼材の種類</th> <th>種類記号</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2012</td> <td>SN</td> <td>建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2020</td> <td>SS</td> <td>一般構造用の圧延鋼材。</td> </tr> <tr> <td>溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2020</td> <td>SM</td> <td>圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021</td> <td>SSC</td> <td>冷間成形^②された軽量形鋼。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021</td> <td>STK</td> <td>一般構造用の円形断面の鋼管。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021</td> <td>STKR</td> <td>一般構造用の角形断面の鋼管。</td> </tr> <tr> <td>建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021</td> <td>STKN</td> <td>建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。</td> </tr> </tbody> </table>	鋼材の種類	種類記号	特徴	建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2012	SN	建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。	一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2020	SS	一般構造用の圧延鋼材。	溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2020	SM	圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。	一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021	SSC	冷間成形 ^② された軽量形鋼。	一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021	STK	一般構造用の円形断面の鋼管。	一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021	STKR	一般構造用の角形断面の鋼管。	建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021	STKN	建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>鋼材の種類</th> <th>種類記号</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2022</td> <td>SN</td> <td>建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2022</td> <td>SS</td> <td>一般構造用の圧延鋼材。</td> </tr> <tr> <td>溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2022</td> <td>SM</td> <td>圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021</td> <td>SSC</td> <td>冷間成形^②された軽量形鋼。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021</td> <td>STK</td> <td>一般構造用の円形断面の鋼管。</td> </tr> <tr> <td>一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021</td> <td>STKR</td> <td>一般構造用の角形断面の鋼管。</td> </tr> <tr> <td>建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021</td> <td>STKN</td> <td>建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。</td> </tr> </tbody> </table>	鋼材の種類	種類記号	特徴	建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2022	SN	建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。	一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2022	SS	一般構造用の圧延鋼材。	溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2022	SM	圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。	一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021	SSC	冷間成形 ^② された軽量形鋼。	一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021	STK	一般構造用の円形断面の鋼管。	一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021	STKR	一般構造用の角形断面の鋼管。	建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021	STKN	建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。
		鋼材の種類	種類記号	特徴																																																
建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2012	SN	建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。																																																		
一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2020	SS	一般構造用の圧延鋼材。																																																		
溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2020	SM	圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。																																																		
一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021	SSC	冷間成形 ^② された軽量形鋼。																																																		
一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021	STK	一般構造用の円形断面の鋼管。																																																		
一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021	STKR	一般構造用の角形断面の鋼管。																																																		
建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021	STKN	建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。																																																		
鋼材の種類	種類記号	特徴																																																		
建築構造用圧延鋼材 JIS G 3136 : 2022	SN	建築物用の鋼材で、ABC の三つの性能の区分がある。A 種は溶接しない部材に適し、B 種は粘り強く、骨組に用いる。C 種は板厚方向の強さを強化したもので、板厚方向に大きな力が生じる部分に用いる。																																																		
一般構造用圧延鋼材 JIS G 3101 : 2022	SS	一般構造用の圧延鋼材。																																																		
溶接構造用圧延鋼材 JIS G 3106 : 2022	SM	圧延鋼材で、とくに溶接性がよいもの。																																																		
一般構造用軽量形鋼 JIS G 3350 : 2021	SSC	冷間成形 ^② された軽量形鋼。																																																		
一般構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3444 : 2021	STK	一般構造用の円形断面の鋼管。																																																		
一般構造用角形鋼管 JIS G 3466 : 2021	STKR	一般構造用の角形断面の鋼管。																																																		
建築構造用炭素鋼鋼管 JIS G 3475 : 2021	STKN	建築物用の円形断面の鋼管。SN 材と同等の性能をもつ。																																																		
		表8	(JIS G 3101 : 2020, G 3106 : 2020, G 3136 : 2012 より作成)	(JIS G 3101 : 2022, G 3106 : 2022, G 3136 : 2022 より作成)																																																
2	195	側注2	② JIS A 5406 : 2017 参照。	② JIS A 5406 : 2023 参照。																																																

番号	訂正箇所		原文	訂正文																																						
	ページ	行																																								
3	132	10	<p>軽量骨材^{挿入}</p> <p>(10行目の側注欄に追加)</p>	<p>軽量骨材⁶</p> <p>5 普通骨材より密度の小さい骨材。</p>																																						
		側注追加	<p>表3</p>																																							
		側注5 側注6	<p>5 コンクリート構造物の解体時などに発生するコンクリート塊を砕き分別したもの。</p> <p>6 普通骨材より密度の小さい骨材。</p>	<p>6 コンクリート構造物の解体時などに発生するコンクリート塊を砕き分別したもの。</p> <p>削除</p>																																						
4	132	表4	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">コンクリートの種類</th> <th colspan="2">使用骨材</th> <th rowspan="2">気乾単位容積質量 [t/m³]</th> </tr> <tr> <th>粗骨材</th> <th>細骨材</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>普通コンクリート</td> <td>砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など</td> <td>砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など</td> <td>2.1を超え 2.5以下</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">軽量コンクリート</td> <td>1種</td> <td>人工軽量粗骨材</td> <td>砂・砕砂・再生細骨材Hなど</td> <td>1.8~2.1</td> </tr> <tr> <td>2種</td> <td>主として人工軽量粗骨材</td> <td>主として人工軽量細骨材</td> <td>1.4~1.8</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</p>	コンクリートの種類	使用骨材		気乾単位容積質量 [t/m ³]	粗骨材	細骨材	普通コンクリート	砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など	砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など	2.1を超え 2.5以下	軽量コンクリート	1種	人工軽量粗骨材	砂・砕砂・再生細骨材Hなど	1.8~2.1	2種	主として人工軽量粗骨材	主として人工軽量細骨材	1.4~1.8	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">コンクリートの種類</th> <th colspan="2">使用骨材</th> <th rowspan="2">気乾単位容積質量 [t/m³]</th> </tr> <tr> <th>粗骨材</th> <th>細骨材</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>普通コンクリート</td> <td>砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など</td> <td>砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など</td> <td>2.1を超え 2.5以下</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">軽量コンクリート</td> <td>1種</td> <td>人工軽量粗骨材</td> <td>砂・砕砂・再生細骨材Hなど</td> <td>1.8~2.1</td> </tr> <tr> <td>2種</td> <td>主として人工軽量粗骨材</td> <td>主として人工軽量細骨材</td> <td>1.4~1.8</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</p>	コンクリートの種類	使用骨材		気乾単位容積質量 [t/m ³]	粗骨材	細骨材	普通コンクリート	砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など	砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など	2.1を超え 2.5以下	軽量コンクリート	1種	人工軽量粗骨材	砂・砕砂・再生細骨材Hなど	1.8~2.1	2種	主として人工軽量粗骨材	主として人工軽量細骨材	1.4~1.8
		コンクリートの種類	使用骨材		気乾単位容積質量 [t/m ³]																																					
粗骨材	細骨材																																									
普通コンクリート	砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など	砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など	2.1を超え 2.5以下																																							
軽量コンクリート	1種	人工軽量粗骨材	砂・砕砂・再生細骨材Hなど	1.8~2.1																																						
	2種	主として人工軽量粗骨材	主として人工軽量細骨材	1.4~1.8																																						
コンクリートの種類	使用骨材		気乾単位容積質量 [t/m ³]																																							
	粗骨材	細骨材																																								
普通コンクリート	砂利・砕石・高炉スラグ粗骨材など	砂・砕砂・高炉スラグ細骨材など	2.1を超え 2.5以下																																							
軽量コンクリート	1種	人工軽量粗骨材	砂・砕砂・再生細骨材Hなど	1.8~2.1																																						
	2種	主として人工軽量粗骨材	主として人工軽量細骨材	1.4~1.8																																						

番号	訂正箇所		原文	訂正文
	ページ	行		
4 (続き)	134	22~23	<p><u>低下する。一般には、AE 剤</u> <u>を用いた</u></p>	<p><u>低下するので、</u></p>
	134	26	<p><u>。したがって、この方法を用いてはならない。</u></p> <p>(26行目の側注欄に追加)</p>	<p><u>ので、水量には上限^⑩が設けられている。</u></p> <p>⑩ →p.138表8</p>
	136	側注2	<p>② <u>admixture</u> 挿入</p>	<p>② <u>chemical admixture:</u> セメント、水および骨材以外の材料で、コンクリートに特別な性質を与えるために加える混和材料には、混和剤と混和材がある。 混和剤は、使用量が微量でコンクリートの練上がり容積には算入されない。 混和材(admixture)は、使用量は少量であるが、コンクリートの練上がり容積に算入される。高炉スラグ微粉末、フライアッシュ、石粉などがある。 また、セメントと混和材の微粉末状の物質を総称して粉体という。</p>

番号	訂正箇所		原文	訂正文																				
	ページ	行																						
4 (続き)	137	表7	<table border="1"> <thead> <tr> <th>基本項目</th> <th>おもな要因</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>時間</td> <td>材齢</td> </tr> <tr> <td>使用材料</td> <td>セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤</td> </tr> <tr> <td>調合設計</td> <td>水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度</td> </tr> <tr> <td>施工条件</td> <td>打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生</td> </tr> </tbody> </table> <p>(21 行目の側注欄に追加)</p>	基本項目	おもな要因	時間	材齢	使用材料	セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤	調合設計	水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度	施工条件	打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生	<table border="1"> <thead> <tr> <th>基本項目</th> <th>おもな要因</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>時間</td> <td>材齢</td> </tr> <tr> <td>使用材料</td> <td>セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤</td> </tr> <tr> <td>調合設計</td> <td>水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度</td> </tr> <tr> <td>施工条件</td> <td>打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生</td> </tr> </tbody> </table> <p>③ →p.138</p>	基本項目	おもな要因	時間	材齢	使用材料	セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤	調合設計	水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度	施工条件	打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生
	基本項目	おもな要因																						
時間	材齢																							
使用材料	セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤																							
調合設計	水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度																							
施工条件	打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生																							
基本項目	おもな要因																							
時間	材齢																							
使用材料	セメントの種類, 骨材, 練混ぜ水, 混和剤																							
調合設計	水セメント比, 空気量, セメントの圧縮強度																							
施工条件	打込み方法, 締固め方法, 温度, 養生																							
	138	側注1	<p>① water-cement ratio 挿入</p>	<p>① water-cement ratio: セメント以外の結合材を混和材として加える場合は、水結合材比を用いる。 結合材 (binder)は、セメント、高炉スラグ微粉末、フライアッシュなど水と反応してコンクリートの硬化に寄与する材料のことである。 水結合材比 (water - binder ratio) は水と結合材の質量比のことである。</p>																				

番号	訂正箇所		原文	訂正文																											
	ページ	行																													
4 (続き)	138	8~9	<p>水セメント比の</p> <p>挿入 最大値は表8に示す数値以下に定められている。</p> <p>側注3</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">③ →p.142</p> <p>(10行目の側注欄に追加)</p> <p>表8</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">分類</th> <th rowspan="2">セメントの種類</th> <th colspan="2">計画供用期間の級^④</th> </tr> <tr> <th>短期・標準・長期</th> <th>超長期</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">ポルトランドセメント</td> <td>普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント</td> <td>65%</td> <td rowspan="2">55%</td> </tr> <tr> <td>低熟ポルトランドセメント</td> <td>60%</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">混合セメント</td> <td>高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種</td> <td>65%</td> <td rowspan="2">—</td> </tr> <tr> <td>高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種</td> <td>60%</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</p>	分類	セメントの種類	計画供用期間の級 ^④		短期・標準・長期	超長期	ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント	65%	55%	低熟ポルトランドセメント	60%	混合セメント	高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種	65%	—	高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種	60%	<p>水セメント比の</p> <p>最大値^④は表8に示す数値以下に定められている。</p> <p>削除</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">③ セメント以外に混和材を加える場合は、混和材の微粉末も含めた水粉体比を用いる。水粉体比は、水と粉体の質量比の百分率であり、最大値は水セメント比と同じ65%である。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>分類</th> <th>セメントの種類</th> <th>水セメント比の最大値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ポルトランドセメント</td> <td>普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント 低熟ポルトランドセメント</td> <td>65%</td> </tr> <tr> <td>混合セメント</td> <td>高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種 高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種</td> <td>65%</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</p>	分類	セメントの種類	水セメント比の最大値	ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント 低熟ポルトランドセメント	65%	混合セメント	高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種 高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種	65%
分類	セメントの種類	計画供用期間の級 ^④																													
		短期・標準・長期	超長期																												
ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント	65%	55%																												
	低熟ポルトランドセメント	60%																													
混合セメント	高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種	65%	—																												
	高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種	60%																													
分類	セメントの種類	水セメント比の最大値																													
ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント 早強ポルトランドセメント 中庸熟ポルトランドセメント 低熟ポルトランドセメント	65%																													
混合セメント	高炉セメントA種 フライアッシュセメントA種 高炉セメントB種 フライアッシュセメントB種	65%																													

番号	訂正箇所		原文	訂正文																						
	ページ	行																								
4 (続き)	139	表9	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">コンクリートの種類</th> <th>設計基準強度 F_c</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="2">普通コンクリート</td> <td>18, 21, 24, 27, 30, 33, 36</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">軽量コンクリート</td> <td>1種</td> <td>18, 21, 24, 27, 30, 33, 36</td> </tr> <tr> <td>2種</td> <td>18, 21, 24, 27</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</p>	コンクリートの種類		設計基準強度 F_c	普通コンクリート		18, 21, 24, 27, 30, 33, 36	軽量コンクリート	1種	18, 21, 24, 27, 30, 33, 36	2種	18, 21, 24, 27	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">コンクリートの種類</th> <th>設計基準強度 F_c</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="2">普通コンクリート</td> <td>18 以上 48 以下</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">軽量コンクリート</td> <td>1種</td> <td>18 以上 36 以下</td> </tr> <tr> <td>2種</td> <td>18 以上 27 以下</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</p>	コンクリートの種類		設計基準強度 F_c	普通コンクリート		18 以上 48 以下	軽量コンクリート	1種	18 以上 36 以下	2種	18 以上 27 以下
	コンクリートの種類		設計基準強度 F_c																							
普通コンクリート		18, 21, 24, 27, 30, 33, 36																								
軽量コンクリート	1種	18, 21, 24, 27, 30, 33, 36																								
	2種	18, 21, 24, 27																								
コンクリートの種類		設計基準強度 F_c																								
普通コンクリート		18 以上 48 以下																								
軽量コンクリート	1種	18 以上 36 以下																								
	2種	18 以上 27 以下																								
	141	10 側注追加	<p>得られ、^{挿入}経済性も満足するように、</p> <p>(10行目の側注欄に追加)</p>	<p>得られ、<u>環境性^②</u>や経済性も満足するように、</p>																						
	図17 (a)	側注3	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <p>(a) 品質基準強度 F_q [N/mm²] を決める</p> <p>設計基準強度^② F_c] — 高いほうの値を F_q とする</p> <p>耐久設計基準強度 F_d] —</p> </div> <p>② →p.139表9</p>	<div style="border: 1px solid red; padding: 5px;"> <p>② コンクリートに使用する材料は、建築物の供用期間中に有害化学物質が溶出ししないものを使用し、使用する材料の資源循環性と低炭素性を等級評価すること。</p> </div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <p>(a) 品質基準強度 F_q [N/mm²] を決める</p> <p>設計基準強度^③ F_c] — 高いほうの値を F_q とする</p> <p>耐久設計基準強度 F_d] —</p> </div> <p>③ →p.139表9</p>																						
	図17 (c)		<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <p>(c) 調合強度 F [N/mm²] を決める^{挿入}</p> <p>$F \geq F_m + 1.73 \sigma$] — 高いほうの値を F とする</p> <p>$F \geq 0.85 F_m + 3 \sigma$] —</p> </div>	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <p>(c) 調合強度 F [N/mm²] を決める^④</p> <p>$F \geq F_m + 1.73 \sigma$] — 高いほうの値を F とする</p> <p>$F \geq 0.85 F_m + 3 \sigma$] —</p> </div>																						

番号	訂正箇所		原文	訂正文																														
	ページ	行																																
4 (続き)	141	側注追加	(図 17(c) の側注欄に追加)	④ 調査管理強度を決定したあとに続く調査は、原則としてコンクリート製造工場が行う。																														
	142	表10	<table border="1"> <thead> <tr> <th>計画供用期間の級</th> <th>計画供用期間</th> <th>耐久設計基準強度 [N/mm²]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>短期供用級</td> <td>およそ 30 年</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>標準供用級</td> <td>およそ 65 年</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>長期供用級</td> <td>およそ 100 年</td> <td>30^{挿入}</td> </tr> <tr> <td>超長期供用級</td> <td><u>およそ 200 年</u></td> <td>36*</td> </tr> </tbody> </table> <p>* かぶり厚さを 10 mm 増やした場合は、30 N/mm²とすることができる。 <small>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</small></p>	計画供用期間の級	計画供用期間	耐久設計基準強度 [N/mm ²]	短期供用級	およそ 30 年	18	標準供用級	およそ 65 年	24	長期供用級	およそ 100 年	30 ^{挿入}	超長期供用級	<u>およそ 200 年</u>	36*	<table border="1"> <thead> <tr> <th>計画供用期間の級</th> <th>計画供用期間</th> <th>耐久設計基準強度 [N/mm²]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>短期供用級</td> <td>およそ 30 年</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>標準供用級</td> <td>およそ 65 年</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>長期供用級</td> <td>およそ 100 年</td> <td>30*</td> </tr> <tr> <td>超長期供用級</td> <td><u>100 年超</u></td> <td>36**</td> </tr> </tbody> </table> <p>* かぶり厚さを 10 mm 増やした場合は、27 N/mm²とすることができる。 ** <u>かぶり厚さを 10 mm 増やした場合は、30 N/mm²とすることができる。</u> <small>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</small></p>	計画供用期間の級	計画供用期間	耐久設計基準強度 [N/mm ²]	短期供用級	およそ 30 年	18	標準供用級	およそ 65 年	24	長期供用級	およそ 100 年	30*	超長期供用級	<u>100 年超</u>	36**
	計画供用期間の級	計画供用期間	耐久設計基準強度 [N/mm ²]																															
短期供用級	およそ 30 年	18																																
標準供用級	およそ 65 年	24																																
長期供用級	およそ 100 年	30 ^{挿入}																																
超長期供用級	<u>およそ 200 年</u>	36*																																
計画供用期間の級	計画供用期間	耐久設計基準強度 [N/mm ²]																																
短期供用級	およそ 30 年	18																																
標準供用級	およそ 65 年	24																																
長期供用級	およそ 100 年	30*																																
超長期供用級	<u>100 年超</u>	36**																																
143	13~15	フレッシュコンクリート 1m ³ 中に <u>必要な水・セメント・骨材の量</u> を単位水量・単位セメント量・	フレッシュコンクリート 1m ³ 中に <u>含まれる水・セメント・骨材の質量</u> を単位水量・単位セメント量・																															

番号	訂正箇所		原文	訂正文																				
	ページ	行																						
4 (続き)	146	表14	<table border="1"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高強度 コンクリート^①</td> <td>設計基準強度が36 N/mm²を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート^②の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。</td> </tr> <tr> <td>高流動 コンクリート</td> <td>構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、55 cm～65 cm の範囲にする。</td> </tr> <tr> <td>寒中 コンクリート^③</td> <td>養生^④期間中にコンクリートが凍結するおそれがある場合に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。</td> </tr> <tr> <td>暑中 コンクリート</td> <td>コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">挿入</p>	種類	特徴	高強度 コンクリート ^①	設計基準強度が36 N/mm ² を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート ^② の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。	高流動 コンクリート	構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、55 cm～65 cm の範囲にする。	寒中 コンクリート ^③	養生 ^④ 期間中にコンクリートが凍結するおそれがある場合に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。	暑中 コンクリート	コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高強度 コンクリート^①</td> <td>設計基準強度が48 N/mm²を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート^②の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。</td> </tr> <tr> <td>高流動 コンクリート</td> <td>構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、45 cm～65 cm の範囲にする。</td> </tr> <tr> <td>寒中 コンクリート^③</td> <td>養生^④期間中に気温が低く、コンクリートの凍結や強度発現の遅れが生じるおそれのある時期に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。</td> </tr> <tr> <td>暑中 コンクリート</td> <td>コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</p>	種類	特徴	高強度 コンクリート ^①	設計基準強度が48 N/mm ² を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート ^② の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。	高流動 コンクリート	構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、45 cm～65 cm の範囲にする。	寒中 コンクリート ^③	養生 ^④ 期間中に気温が低く、コンクリートの凍結や強度発現の遅れが生じるおそれのある時期に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。	暑中 コンクリート	コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。
			種類	特徴																				
			高強度 コンクリート ^①	設計基準強度が36 N/mm ² を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート ^② の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。																				
高流動 コンクリート	構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、55 cm～65 cm の範囲にする。																							
寒中 コンクリート ^③	養生 ^④ 期間中にコンクリートが凍結するおそれがある場合に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。																							
暑中 コンクリート	コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。																							
種類	特徴																							
高強度 コンクリート ^①	設計基準強度が48 N/mm ² を超えるコンクリートをいう。プレストレストコンクリート ^② の構造物、高層建築物の躯体などに使用される。水セメント比を小さくして強度を高めるが、流動性が悪くなるので、高性能 AE 減水剤を用いる。火熱による爆裂を防ぐために細かな繊維や樹脂を混入することもある。																							
高流動 コンクリート	構成材料が分離することなく、流動性を著しく高めたコンクリートをいう。セメントや石灰石微粉末などの粉体、または増粘剤を混入し、高性能 AE 減水剤を用いて流動性を高める。流動性はスランプフローで表し、45 cm～65 cm の範囲にする。																							
寒中 コンクリート ^③	養生 ^④ 期間中に気温が低く、コンクリートの凍結や強度発現の遅れが生じるおそれのある時期に使用するコンクリートで、単位水量をできるだけ少なくし、AE 剤などを混和して気泡を適度に分散させ凍害を防ぐ。気温によっては断熱または加熱して養生する。コンクリートを製造するときに、骨材と水を加熱する方法もとられる。																							
暑中 コンクリート	コンクリート打ち込み時や養生期間が高温になると、凝結の進行や水分の蒸発が速くなり、スランプの低下や長期強度の低下、ひび割れが発生したりする。これを防ぐために、凝結速度を遅らせる遅延形の AE 減水剤をコンクリートに混和する。コンクリートを製造するときに、散水して冷却した骨材を使用することもある。																							
163	表2	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)																					
164	表3 表4	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成) (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成) (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)																					

番号	訂正箇所		原文	訂正文																																																									
	ページ	行																																																											
4 (続き)	165	表6	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)	(日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)																																																									
	166	5 側注追加	かぶり厚さは、 <small>挿入</small> (5行目の側注欄に追加)	一般劣化環境 ^② でのかぶり厚さは、 <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;">② 海水の作用や激しい凍結融解作用を受けない環境のこと。</div>																																																									
	166	表7	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>部材の種類</th> <th>場所</th> <th>屋内</th> <th>屋外¹⁾</th> <th>建築基準法施行令</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">構造部材</td> <td>柱・梁・耐力壁</td> <td>40 mm</td> <td>50 mm</td> <td>3 cm 以上</td> </tr> <tr> <td>床スラブ・屋根スラブ</td> <td>30 mm</td> <td>40 mm</td> <td>2 cm 以上</td> </tr> <tr> <td>非構造部材</td> <td>構造部材と同等の耐久性を要求する部材</td> <td>30 mm</td> <td>40 mm</td> <td>2 cm 以上</td> </tr> <tr> <td colspan="2">直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分</td> <td colspan="2">50 mm</td> <td>4 cm 以上</td> </tr> <tr> <td colspan="2">基礎</td> <td colspan="2">70 mm</td> <td>6 cm 以上</td> </tr> </tbody> </table> <p>注. 1) 計画供用期間の級が標準および長期で、張仕上げや塗仕上げなどの仕上げを施す場合は、屋外側では、設計かぶり厚さを 10 mm 減じることができる。 (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</p>	部材の種類	場所	屋内	屋外 ¹⁾	建築基準法施行令	構造部材	柱・梁・耐力壁	40 mm	50 mm	3 cm 以上	床スラブ・屋根スラブ	30 mm	40 mm	2 cm 以上	非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30 mm	40 mm	2 cm 以上	直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分		50 mm		4 cm 以上	基礎		70 mm		6 cm 以上	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>部材の種類</th> <th>場所</th> <th>非腐食環境(屋内等)</th> <th>腐食環境(屋外¹⁾等)</th> <th>建築基準法施行令</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">構造部材</td> <td>柱・梁・耐力壁</td> <td>40 mm</td> <td>50 mm</td> <td>3 cm 以上</td> </tr> <tr> <td>床スラブ・屋根スラブ</td> <td>30 mm</td> <td>40 mm</td> <td>2 cm 以上</td> </tr> <tr> <td>非構造部材</td> <td>構造部材と同等の耐久性を要求する部材</td> <td>30 mm</td> <td>40 mm</td> <td>2 cm 以上</td> </tr> <tr> <td colspan="2">直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分</td> <td colspan="2">50 mm</td> <td>4 cm 以上</td> </tr> <tr> <td colspan="2">基礎</td> <td colspan="2">70 mm</td> <td>6 cm 以上</td> </tr> </tbody> </table> <p>注. 1) 計画供用期間の級が標準および長期で、張仕上げや塗仕上げなどの仕上げを施す場合は、屋外側では、設計かぶり厚さを 10 mm 減じることができる。 (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2022」より作成)</p>	部材の種類	場所	非腐食環境(屋内等)	腐食環境(屋外 ¹⁾ 等)	建築基準法施行令	構造部材	柱・梁・耐力壁	40 mm	50 mm	3 cm 以上	床スラブ・屋根スラブ	30 mm	40 mm	2 cm 以上	非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30 mm	40 mm	2 cm 以上	直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分		50 mm		4 cm 以上	基礎		70 mm	
部材の種類	場所	屋内	屋外 ¹⁾	建築基準法施行令																																																									
構造部材	柱・梁・耐力壁	40 mm	50 mm	3 cm 以上																																																									
	床スラブ・屋根スラブ	30 mm	40 mm	2 cm 以上																																																									
非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30 mm	40 mm	2 cm 以上																																																									
直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分		50 mm		4 cm 以上																																																									
基礎		70 mm		6 cm 以上																																																									
部材の種類	場所	非腐食環境(屋内等)	腐食環境(屋外 ¹⁾ 等)	建築基準法施行令																																																									
構造部材	柱・梁・耐力壁	40 mm	50 mm	3 cm 以上																																																									
	床スラブ・屋根スラブ	30 mm	40 mm	2 cm 以上																																																									
非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30 mm	40 mm	2 cm 以上																																																									
直接、土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立ち上がり部分		50 mm		4 cm 以上																																																									
基礎		70 mm		6 cm 以上																																																									
166	13	<div style="border: 1px solid green; padding: 2px; display: inline-block;">問 8</div> 建築物の躯体において、計画供用期間が長期で屋外側の <small>挿入</small>	<div style="border: 1px solid green; padding: 2px; display: inline-block;">問 8</div> 一般劣化環境での建築物の躯体において、計画供用期間が長期で腐食環境(屋外側)の																																																										

番号	訂正箇所	
	ページ	行

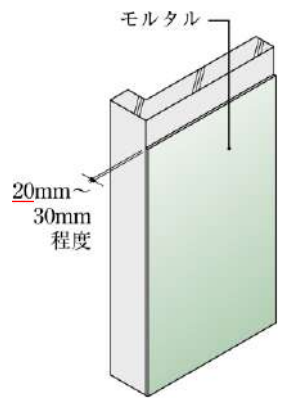
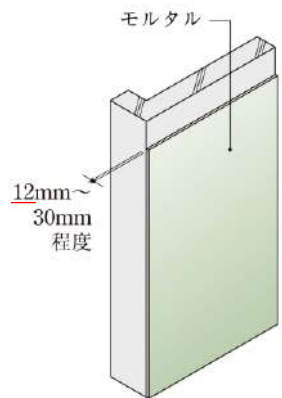
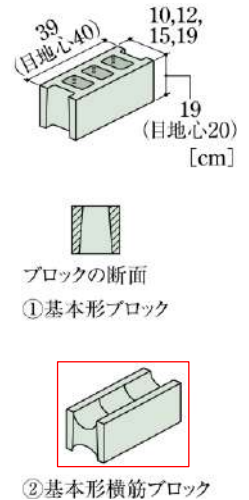
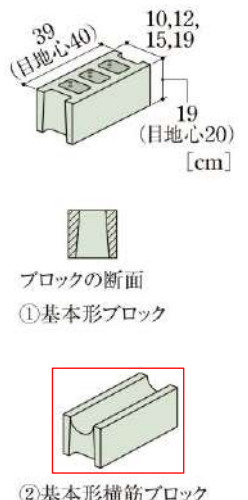
4 (続き)	168	図24	<p style="text-align: center;">原 文</p> <p>(a) 梁主筋の継手位置</p> <p>重ね継手 (フックなしの場合)</p> <p>① L_1 $1.5L_1$以上 L_1 L_1: 重ね長さ</p> <p>② $0.5L_1$ 程度</p> <p>ガス圧接 継手</p> <p>400mm以上</p> <p>(b) 柱主筋の継手</p> <p>継手の位置</p> <p>(c) 継手の標準的な配置</p> <p style="text-align: center;">図 24 継手の位置と標準的な配置 (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2018」より作成)</p>
-----------	-----	-----	--

訂正文		
-----	--	--

4 (続き)	201	2	<p style="text-align: center;">訂正文</p> <p>(a) 梁主筋の継手位置</p> <p>重ね継手 (フックなしの場合)</p> <p>① L_1 $1.5L_1$以上 L_1 L_1: 重ね長さ</p> <p>② $0.5L_1$ 程度</p> <p>ガス圧接 継手</p> <p>400mm以上</p> <p>(b) 柱主筋の継手</p> <p>継手の位置</p> <p>(c) 継手の標準的な配置</p> <p style="text-align: center;">図 24 継手の位置と標準的な配置 (日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事:2028」より作成)</p>
-----------	-----	---	--

5	135	18	<p>練混ぜ水の一部が分離して、 挿入</p>
---	-----	----	-----------------------------

5	135	18	<p>固体材料の沈降または分離によって練混ぜ水の一部が遊離して、</p>
---	-----	----	--------------------------------------

番号	訂正箇所		原文	訂正文
	ページ	行		
6	178	図7	 <p>モルタル</p> <p>20mm~ 30mm 程度</p>	 <p>モルタル</p> <p>12mm~ 30mm 程度</p>
7	195	図6 (a)	 <p>39 (目地心40)</p> <p>10,12, 15,19</p> <p>19 (目地心20) [cm]</p> <p>ブロックの断面</p> <p>①基本形ブロック</p> <p>②基本形横筋ブロック</p>	 <p>39 (目地心40)</p> <p>10,12, 15,19</p> <p>19 (目地心20) [cm]</p> <p>ブロックの断面</p> <p>①基本形ブロック</p> <p>②基本形横筋ブロック</p>